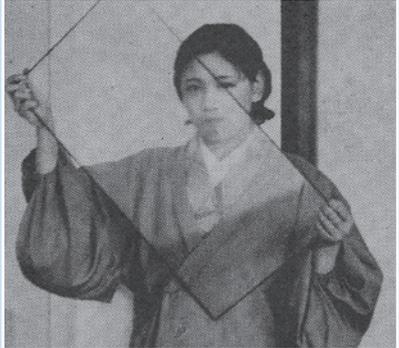




大正時代の特殊ガラス

第一次世界大戦が終わった大正8年頃は、科学の進歩に伴い諸工業が急速に発展していった時代です。そのため、様々な分野で優れた化学用ガラスが必要とされるようになり、必然的にその発達が促されるようにもなりました。当時、外国製の耐熱化学用ガラスは精密化学実験容器や高圧電気容器、化学工業用装置部品などその使用分野を急速に広げていったため、国内のガラスメーカーも耐熱化学用ガラスの研究に力を入れていきます。



安全ガラス

岩城硝子製造所も、大正期に入ってから一層優れた化学用ガラスを生み出すために懸命の努力を続けていましたが、滝次郎亡きあと、その長男・岩城岩太郎が経営を引き継ぎ、大正10年(1921)に個人経営を合資会社に改め、これを機に、岩太郎の長男・勝美を代表者として岩城倉之助が経営の任にあたり、工場も深川に移していました。

そうした中で、大正11年(1922)、我が国で初めて三層式安全ガラスの製造に成功。これは2枚以上の板ガラスの中間に接着剤を挿入し貼り合せたもので、別名「防弾ガラス」「サンドイッチガラス」とも呼ばれ、艦船や航空機部品などに使われていました。



そして大正15年(1926)には、海外製の化学用ガラスとほぼ同様の特性を有する商品の開発に成功します。これは、電気的、機械的、熱的、化学的性質など当時の国産化学用ガラスの中でも最高の水準にあり、電気絶縁物、理化医療用、そして食器などに使われていきました。

こうした特殊ガラスの開発の成功は、岩城硝子製造所の硬質ガラスの領域を広げ、その他にも組成の異なる特殊な硬質ガラスを生み出していきました。

日本での化学用ガラスの生産額は、大正初めから20年を経た昭和10年頃には25倍にも上昇していったようですが、創業期を終えた岩城硝子製造所も日本の特殊ガラス工業の先兵として歩み、昭和12年(1937)10月5日株式会社組織になり、現在の礎を築いていくこととなります。

板物は世界一 特殊品にも成功 用途廣汎な硝子類

これは「安全ガラス」だと思つたが、ある硝子類に「二重ガラス」を考案して作られる急進的なものだから、と早く「安全ガラス」と呼ぶようになった。これは、硝子の板を二枚重ね、その間に接着剤を挿入し、貼り合せたものである。これを「サンドイッチガラス」と呼ぶ。これは、防弾ガラス、航空機部品などに使われていた。これは、大正11年(1922)に我が国で初めて製造されたものである。これは、硝子の板を二枚重ね、その間に接着剤を挿入し、貼り合せたものである。これを「サンドイッチガラス」と呼ぶ。これは、防弾ガラス、航空機部品などに使われていた。これは、大正11年(1922)に我が国で初めて製造されたものである。

用途廣汎な硝子類

これは「安全ガラス」だと思つたが、ある硝子類に「二重ガラス」を考案して作られる急進的なものだから、と早く「安全ガラス」と呼ぶようになった。これは、硝子の板を二枚重ね、その間に接着剤を挿入し、貼り合せたものである。これを「サンドイッチガラス」と呼ぶ。これは、防弾ガラス、航空機部品などに使われていた。これは、大正11年(1922)に我が国で初めて製造されたものである。

少額な

これは「安全ガラス」だと思つたが、ある硝子類に「二重ガラス」を考案して作られる急進的なものだから、と早く「安全ガラス」と呼ぶようになった。これは、硝子の板を二枚重ね、その間に接着剤を挿入し、貼り合せたものである。これを「サンドイッチガラス」と呼ぶ。これは、防弾ガラス、航空機部品などに使われていた。これは、大正11年(1922)に我が国で初めて製造されたものである。

昭和9年の報知新聞記事 岩城の安全ガラスについて
報知新聞(昭和9年12月19日~12月22日)所蔵:神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫